

豊明希望チャペル礼拝

2023/3/19

ヨハネの福音書 14：18～24

「主が共に住まわれる」

キリストは見えなくなるが、共におられることを、祈りにおいてきかれる約束を通して示し、父なる神がなによりも見ておられることを何度も繰り返して語られ、さらには、前回、聖霊をもう一人の助け主を、カウンセラー、時には、戦友として、あなたの、この世の戦いの最前線まで行かれる方として示されて、弟子達を励まされるイエス様を見てきました。

内村鑑三は、私達を捨てて孤児とはしないと約束されたイエス様を試してみなさいと言うのです。

叫んでみなさい。祈ってみなさいと。イエス様が遠く離れているか、それとも近くにおられるか。

彼が、アメリカに留学していた時、クエーカー教徒の熱心な婦人が、いつか誰かもありましたね。私はね、家の中で無くしたものを捜して見つからない時、祈るのよ、そうすると見つかるのよと言われて、心の中で、内村の言葉ですが「ばあさん、迷信を語るなかれ！」言ったというのです。しかし、今は、本当に信じているし、現に祈って見つかることが多い（全部ではないらしい・・・(笑) しかし、それほどたくさん、彼はその祈りをしているらしい・・・(笑)) と。

で、言うのです。キリスト者は、この（祈りの）実験を積み、キリストが私の祈りを聞くことを確信すれば何が起きてもこわくないと。

孤独ではない、イエス様は、そのことを、祈りの確かさと言うことにおいて保証し、また、三位一体の三すくみで、あなたがたを守り、あなた方に伴うと励まされたのを見ました。

そんな彼らに、イエス様は、今朝、こうおっしゃれるのです。

「14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。」

「孤児にはしない」

「孤児」とは、父親、母親がいず、一人になってしまった子どもをいうわけです。



冷静に言えば、弟子達のほとんどは、いわゆる「孤児」ではなかったはずです。イエス様は、彼らの心情に寄り添い、彼らの思いを代弁されたのです。

あなたがたは、神にも神の子にも捨てられて、孤児のようになっている、そういう思いになっていますねと。

明治時代、日本ではじめて孤児の救済事業をはじめて立ち上げ、「孤児の父」とも言われ、日本の福祉事業の創始者の一人

とも言われるキリスト者「石井十次」はこう言っています。「親のない孤児よりいっそう可哀そうなのは心の迷い児、精神の孤児だ」と。彼は、親のない子が可愛そうだと同情を寄せてくれるが、親がいても、神の愛を感じることもない心の迷い子が、イジメや虐待を親から受け、そういう子供たちが、日本にはたくさんいることを知っていました。

彼の目は、そういうところにも向けられていたのです。

しかし、この言葉をわたしが聞くと、彼が自分自身の事も含めているのではないかと感じるのです。それは、生い立ちによらず、根本的に、罪人は孤独だからです。

「孤児」あるいは、「孤独」の問題は、罪の世界に生きる、私たち一人一人の罪の問題なのです。

現代におけるこの「孤独」の問題は深刻だと言われます。

私には家族がある・・・いいえ、一見すぐく幸せそうに見える夫婦や家庭にも、お互いの価値観の違いなどで意思の疎通がうまく行かず、いつの間にか、すれ違いが起こり、気づいた時には深い溝が出来ていて、隙間風が吹いているという人々であふれています。職場に行って、同僚を見て下さい。時間に追われてあくせくと働くサラリーマンにも、その心をのぞくと言いたいような孤独があります。家事に追われる家庭の主婦も、受験勉強に疲れている学生も、あるいは、間もなく定年を迎えようとしやっと自由が楽しめるのかということ、さにあらず、老後をどのように過ごすかと考えあぐねて悩み、人生の最後の時が刻々と近づいている・・・心の奥を覗けば、言い知れぬ不安と孤独感でいっぱいなのです。若者も、年寄りも、女も男も、人間の心はみな、心の奥底のどこかで深い孤独感を味わい、渴いて求めています。

パウロは、ローマ人への手紙で、神から離れ、神に感謝せずに歩むことを決めたアダム以来の人間の心を、このように表現しました。

1:21「彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」と。何をやっても空しさが残る。寂しさが残る。これは、神から離れた人間の孤独感です。これを神学では「原罪」と呼びます。誰もが生まれながらに持つ罪の性質なのです。天国に行けば解決される問題ですが、逆に言えば、これがあるから私達は罪を自覚出来る。だから誰にも感じることが出来る、いや、感じなければならない。人間の罪の性質なのです。誰にもある感情、心の闇（やみ）なのです。

イエス様は、弟子達ばかりではなくて、そんな私たちにも今朝語られているのだと思うのです。

わたしは、決してあなた方を孤児とはしない。強い決意を持って、語られるのだと思うのです。

続けて 21 節まで読みます。

「14:19 あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。14:20

その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」

22 節で、イスカリオテのユダでないユダ（これはイエス様を裏切ったユダと区別するためですが）が、こう言ったというのです。

「ご自分を・・・世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」と。

ユダの言いたいのは、19 節の、「世はもうわたしを見なくなります・・・」と言われた言葉に対してであることがわかります。すなわち、あなた方には、わたしが神で、聖霊も伴われると言われるが、それは、私たち、信じる者にだけわかるような形ではなくて、「世はわたしをみなくなります・・・」って、イエス様、例えば雲に乗って、この世に天から現れて、もっとヴィジュアル的に、みんながアツと言うような感じで、これぞ、救い主、イエス・キリストなるぞ！皆の者ひれ伏せ！そうすれば、皆もそれで信じるし、わかりやすいんじゃないですか？一気に神の国は完成するんじゃないですか？そんな感じのことを言ったのだと思います。

やっぱりいなくなるのですね。色々、慰めのことばをくれてはいますが、見える形でいて下さいよ！ここにわたしの愛するイエス様がおられます、みんな見て下さいと自慢できるところにいつもいてくださいよ。いなくならないでください！というような叫びのような言葉でしかね・・・

イエス様は、それに対して、直接答える答え方をしておられません。続く 23、24 節で、答えておられるように見えますが、ただ、19～21 節の内容を別の言い方で繰り返されているだけのように見えます。

14:23 「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」「14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。」

要約すれば、あなた方は、私のことがわかる。わたしを愛し、わたしからの御言葉を守り行おうとしている人たちだ。世の人は、愛さない。なぜなら、わたしのことばを行おうなどとまったく考えていないからだ。そういうことです。

ユダよ。だから、これまでも変わらず、わたしが見えなくなっても、見えていと同じ気持ちで、わたしの言葉を守り、見えていなくても、わたしを愛し、神を愛し、信仰生活を続けなさいと勧めているようにも聞こえます。

これは、イエス様が、ここまで、神の子とイエス様の事、聖霊のことを語りながら繰り返し、大丈夫！と励まし勧めてきたことで、もう繰り返すまでもないことなのです。

でも、人は、見えないイエス様、見えない神さまを見て、神に献身を誓い、命をかけて実行し、まるで將軍がそばにいるかのように、勇ましく、この世の戦いをおおしく戦うことは難しいことなんだなあと思います。



孤児にはしない。石井重治の言葉に触れました。
以前、イエス様が弟子達の足を洗う場面で、東京の町田市にある、バット博士記念ホームという、児童養護施設(昔は孤児院と呼ばれた)について、お話ししたことがありました。

ある時、そこでチャプレンをされている、日本同盟基督教団の安藤能成先生に評判が良い施設のようですねと、話した事がありました。先生は、「ありがとう、確かに」とおっしゃられ、こう言われました。

「というのは、職員の心構えが半端でない。あれは、牧師と同じ献身だな・・・だからこそ当然のことのようになむ、それは評判なんだ・・・」と。そして、もちろん、そこには、今日の聖句に従えば「孤児とはしない・・・孤児のままにしておかない」というキリストの存在、キリストの愛があふれているからだと思います。



バット博士の名称のバット師は、カナダ人の宣教師で、戦前と戦後を通して、日本の孤児のために力を尽くされた方です。

1921年に船で、結婚されたばかりの夫人と共に日本に宣教師として来られました。それは、前々回の中国の宣教師、李先生と同じようではありますが、来日二年後の1923年は、関東大震災がおきた年です。救済活動に奉仕され、1939年まで働かれますが、

欧米との戦いで、カナダは敵国となります。彼は気にせず、爆弾を落とされたときに日本人と一緒に消そうと、バケツリレーにも参加され、残るつもりでしたが、反対され、号泣の中、カナダに旅だったと言われます。しかし、終戦の翌年、1946年春には再来日され、5年後の1951年に、脳梗塞で、日本で召されました。社会事業と言うことでは西の賀川豊彦、東のバットと言われ、葬儀には、時の内閣総理大臣も出席しました。

彼のこの行いの動機の一つに父親の言葉があると言われます。父は、最初にカナダを旅立つ日、彼にこう言ったというのです。「日本人を愛せ。日本人になれ。カナダのことはわすれてもいいから。」

もちろん、その父親の背後に、またバット先生に、イエス様の今日の言葉、14:23「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」との約束と命令の言葉に従う決意があったことは間違いのないことだと思います。

弟子達は、叫ぶように訴えたのです。いわば、私達を孤児にはしないで下さい。行かないで下さいと。いったい、この祈りはいつ聞かれたのでしょうか？ 足か

け3日後、復活のイエス様と再会するかたちで、あっという間に、聞かれた。

ただ、その後、また見えなくなるけれど、聖霊の臨在によって、彼らは、見えなくても、心から、神の臨在、イエス様の臨在を感じながら、その愛に満たされながら、歩んだに違いありません。孤児にはしません。その約束は本物だったのです。

今週の歩み。今朝も、イエス様は私達におっしゃられているのです。あなた方はこの世に出て行く。しかし、孤独ではない。クリスチャンがまわりに一人もいなくても、貴方には私が見えている。私はいる。御霊と共にいる。勇気を出しなさい。御言葉に従いなさい。使命を果たしなさい。私はあなたと共にいると。この励ましの言葉をいただいて、今週もこの世に出て行きましょう。